



NO FENCE

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」

会報 かいほう ノーフェンス

NO FENCE

やさしい気持ち、人の痛みを感じる気持ち、誰もが本来持っているそういうものとわたしたちは出会いたい。

vol. **3**
2009年2月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 <http://nofence.netlive.ne.jp> 【郵便振替口座】 NO FENCE / 00180-1-707147



▶主な記事◀

- 「東京国際会議」当日進行内容 2
- 「東京国際会議」の意義—NO FENCEの歩む指標 砂川昌順...3
- 詩「人間だから」 並河真知子...7
- 北朝鮮の人道に対する犯罪を停止するために（提案） 金 尚憲... 8
- アジア人権人道学会設立準備期会／報告 - 小沢木理...10

北朝鮮強制収容所廃絶へ向けて

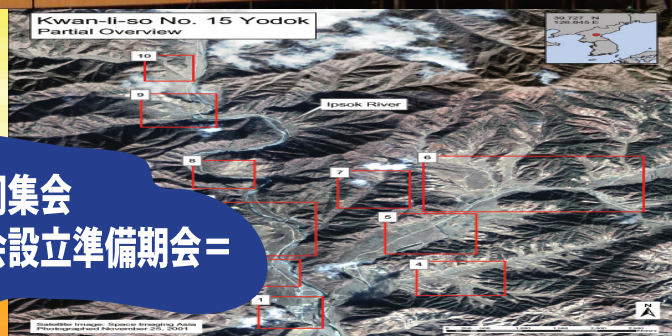
ふたつの期待ふくらむ会議が開かれました。

東京国際会議



北朝鮮の強制収容所を廃絶させる目的のために、収容所体験者・世界の人権活動家が結集しました。

(写真は二枚を合成)



6団体共同集会
=アジア人権人道学会設立準備期会=

強制収容所に、しっかり太陽の光と世界の目が届き、解体に漕ぎ着けるよう、智慧と力を合わせていこうと、意思の確認をし合いました。規模は小さいですが、はじめの一步を踏みだしました。

世界人権宣言 60周年記念



北朝鮮強制収容所廃絶 東京国際会議

(日時) **12月7日(日)** 2008年

開場: 9:30

開演: 10:00 ~ 16:30

(会場) YMCAアジア青少年センター スペースY
(JR水道橋下車5分)

(参加費) 1000円

(主催) NO FENCE



<登壇者順 / プロフィール>

- 小川晴久 … NO FENCE 副代表。二松学舎教授 東京大学名誉教授 東アジア思想史。
- 安 明哲 … 元北朝鮮 22号政治犯強制収容所 完全統制区域 警備隊員
現在、Campaign for the North Korean freedom (NK Freedom) 共同代表。著書『北朝鮮絶望収容所』
- 林ジョンス … 国軍捕虜 2世、政治犯強制収容所 18号完全統制区域に 20年収監
- 申 東赫 … 政治犯強制収容所 14号完全統制区域に 23年収監。著書『収容所で生まれた僕は愛を知らない』
- 金ソンジン … 江界にある収容所予審局での拷問被害者
- デービッド・ホーク … アメリカ アムネスティ・インターナショナル前理事。ヒューマンライツウォッチ アジア顧問。国連人権高等弁務官カンボジア事務所監督者として国連勤務。「北朝鮮 隠された強制収容所」著者。
- 小沼堅司 … NO FENCE 世話人。専修大学法学部教授 西洋政治思想。
- 海老原智治 … 「北朝鮮に拉致された人々を救援する会チェンマイ」(略称「ARNKA(アーンカ)」代表
- ラジブ・ナラヤン … 前アムネスティ・インターナショナル本部極東調査員。延世大学招聘教授。
- 金 尚憲 … 北朝鮮情報データベースセンター代表。元国連世界食料計画に 18年勤務。国際人権活動家
- 砂川昌順 … NO FENCE 共同代表。元外務事務官。『極秘指令』(金賢姫拘束の真相) 著者

□進行 / 小沢木理 … NO FENCE 共同代表

□閉会挨拶 / 並河真知子 □通訳 / ソン ユンボク
●宋 允復 ●上乃久子 ●ケイト・ニールセン □投影 / 菅原民生

NO FENCE

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7 203
TEL&FAX 03-3262-7473

(NO FENCE IN NORTH KOREA)
-北朝鮮強制収容所をなくすアクションの会-

<http://nofence.netlive.ne.jp>

●ネットライブによる同時中継があります。 <http://www.netlive.ne.jp>

午前 10:00~

一部 1939年「英国政府白書」が語るもの

- 北朝鮮とナチ収容所の驚くべき類似 アンミョンチョル 小川晴久
- 金日成・金正日教示の警備員教育 安 明哲
- 完全統制区域からの証言 イム シンドンヒョク 林ジョンス・申 東赫・李 春心

午後 13:20~

二部 収容所廃絶実現に向けて

- 収容所廃絶の青写真 キムサンフォン デービッド・ホーク
- 世界の声・報告 小沼堅司・海老原智治、ラジブ・ナラヤン
- 提案と討論 D・ホーク、金尚憲、ラジブ・ナラヤン、安 明哲、海老原智治、砂川昌順

(*当日、発言者の追加等一部変更がある場合があります。)

=開演 10:00=

■一部 10:00~12:30

<昼の休憩>

12:30~13:20

■二部 13:20~16:30

(途中、小休憩 10分)



待つわけにはいかない！ 人権侵害を無視した安全保障などありえない！
— 民主主義国家は、
人権の尊重が北朝鮮との交渉における不可欠要素であることを明示すべきである —

「東京国際会議」の意義 — NO FENCEの歩む指標

NO FENCE 共同代表

砂川昌順

2008年12月7日(日)に開催されたNO FENCE主催「世界人権宣言60周年記念・北朝鮮強制収容所廃絶・東京国際会議」を概括します。

※同国際会議は、同時生中継されました。会議の中継映像は、ネットサイト<<http://www.netlive.ne.jp/archive/event/081207.html>>で観ることができます。講演や証言の詳細な内容(書き起こし)は、NO FENCEの「アクション・レポート」でご確認いただければ幸いです。会議開催には、「北朝鮮強制収容所をなくすために、わたしたちは何をなすべきか?」何が出来るか?を自問しつつ、収容所廃絶に向けた青写真を掲示するためのステップを見出す意見交換の場を持ちたいとの思いが込められていた。会議は午前10時に始まり、昼食を挟み午後4時半に終了した。午前の部の司会進行役はNO FENCE世話人の小沼堅司氏(専修大学法学部教授)、午後の部は小沢木理氏(NO FENCE共同代表)がそれぞれ務めた。



【朝鮮とナチ収容所の驚くべき類似 — 小川晴久】

会議は、NO FENCE副代表の小川氏(元東京大学名誉教授、現在は二松学舎大学教授)による「北朝鮮とナチ収容所の驚くべき類似」と題した講演で幕を開けた。1939年に英国政府が発行したナチの残虐性を告発する『白書(The White Paper On The Treatment Of German Nationals In Germany)』を紹介。東京国際会議に臨む姿勢を述べ、さらに自己の過去を振り返りながら、「白書を読み解くことによって、そこから見出せるステップを北朝鮮の強制収容所に閉じ込められている人々の一日も早い解放に適應できるのではないか」と提唱。

小川氏は、この白書の存在を『人間の権利』(H.G.Wells著)の中で知るが、同書の日本語訳者である浜野輝氏も登壇。同氏は、20世紀を動かした本の一つに数えられる『人間の権利』の重要性と著作の背景について語り、人権宣言の生みの親とも言われるH.G.Wellsと産婆役のRooseveltアメリカ合衆国32代大統領が発した「恐怖からの自由」「欠乏からの自由」と収容所解放との関連を説いた。

"酷過ぎる"ナチの実態検証における貴重な書籍『ホロコースト—ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』の著者であり東京女子大学教授の芝健介氏も会議に駆けつけた。同氏は、強制労働が組織化されたヴーヘンヴァルト収容所を含むナチ収容所の歴史的背景や変遷を説明。収容所体制作りに関わった人々が裁判によって裁かれた事実に言及し、北朝鮮強制収容所の解体に向けたステップを示唆した。

【金日成・金正日教示の警備兵教育 — アン・ミョン Chol (安明哲)】



アン氏は、1987年から94年にわたり完全統制区域の北朝鮮 22号政治犯強制収容所に警備兵として勤務。1995年に脱北し韓国に亡命した。現在「NK Freedom」の共同代表を務めている。同氏は、北朝鮮国家保衛部の警備兵として受けた金日成の教示による教育の内容を語った。収容されている人々を"人間として扱ってはならない"と思想教育された実態を告白。警備隊による収容者の虐待や虐殺の現実を浮き彫りにした。

同氏は、15号管理所や帰国事業などで日本から北朝鮮に渡った人々が強制的に入れられている村の場所を示した。さらに、16号管理所の位置を初めて明かした。また、核実験場所と政治犯収容所の隣接した位置関係を指摘し強い懸念を示した。

講演では、強制収容所の位置を具体的に明示するために韓国から来日した証言者もアン氏と共に登壇。最近入手したとする衛星写真を用いて、保衛部管轄の完全統制区域や革命化区域の位置などを示し概説した。

最初に、証言者のシン・ドンヒョク氏が14号管理所の施設の概要や電気鉄条網の位置を写真で示しながら説明。

次に、イム・ジョンズ氏が18号管理所の位置や石炭採掘に関連する施設の概要などを写真で示しながら概説。さらに、公開処刑場の場所を指し示した。

アン氏は、自らが警備兵として勤めていた22号管理所の概要や公開処刑場、秘密処刑場の位置を示し、収容者の拷問や取り調べを行う拘留所では、日本人妻が撲殺されるのを目撃したと証言。さらに、ダムと収容所との位置関係を示しながら、有事の際には秘密保持のためにダムを決壊させ管理所の収容者を皆殺しにすることになっていると語り衝撃を与えた。

【完全統制区域からの証言】

- イム・ジョンス
- シン・ドンヒョク (申東赫)
- イ・チュンシム (李春心)】

●まず、イム・ジョンス氏が証言。同氏は、完全統制区域の18号政治犯強制収容所に1歳前後で入れられ、約22年間にわたり収監されていた。収容所に入れられた理由や家族の状況をはじめ、18号収容所の実態や公開処刑の実態を証言。また、聞いた話として帰国事業で北朝鮮に渡った在日朝鮮人たちの悲惨な実状を語った。収容所では、親を憎むような教え込まれるために、自分も親を殺したいと思っていたが、実際に親を殺した人もいたと語り、さらに北朝鮮では、収容所を管理所と称するが、それは人間を物として扱うために管理所と呼んでいるのだとも述べた。



時間の関係で、通訳のソン・ユンボク(宋允復)氏が証言を補足。イム氏の過去の証言を引用し、独房監獄による収容者の残虐な扱いや廃油の入った大きな釜で収容者を揚げ殺すという処刑が存在していたこと、さらに処刑を執行していた一人は、精神異常をきたし廃人となっていたことなどを述べた。

●続いて、シン・ドンヒョク氏が登壇。完全統制区域の14号政治犯収容所で生まれ育ち『収容所で生まれた僕は愛を知らない』の著者としても知られ、これまでも幾度となく来日し証言を行ってきた同氏は、親の罪を償うために生まれたのだと教育され、そのために親を憎み、収容所の中では親子間でも愛情は感じられず、親を監視することでしか生き延びられない状況にあったと語った。

また、オーストリアの精神科医でナチス強制収容所に入れられ生還したビクター・フランクル氏の著作である『夜と霧』を紹介。本の一節を取り上げ、自分ではまだ意味を理解できてはいないとしつつも「選択の自由」について知ろうと思うと話した。警備兵の中には良心の断片なりとも残っている人間もいるであろうから、国際社会の世論の後押しを受けて、そういった人たちが声を挙げられる日が来ることを願っていますと結んだ。

●証言の最後に、イ・チュンシム女氏が登壇。同氏は1980年代から90年代の約11年間、軍の医療部門の看護将校として従軍し除隊。一旦は脱北に成功したが中国で拘束され北朝鮮へ強制送還された。その後、「両江道恵山市保衛部の監獄(拘留、留置施設)」で看護師として強制的に医療・看護補助をさせられた。そこで目撃および体験した強制堕胎をはじめとする収監女性に対する残虐極まりない非人道的な扱いについて、日本で初めて証言した。

中国から強制送還された女性たちに対する悲惨極まりない扱い、堕胎させるために妊婦のお腹の上から胎児の頭を狙いリバノール溶液を注射したり、生きて出てくる胎児は新聞紙にくるみバケツに入れておいて、後でまとめて裏山に埋めるなどの後処理の生々しい証言内容は、言語に絶する"酷過ぎる以上に酷い"悲惨なもので、鮮烈な証言に参加者の誰もが驚愕し衝撃を受けていた。

脱北してきている女性の中には、脱北者である以上に女性としての屈辱的で残酷な経験をしている者も多く、その悲劇が今も続いている事情を知っていただき、皆様のご理解とお力添えをいただきたいと訴えた。溢れ出そうとする涙を必死でこらえ、気力を振り絞っての証言であった。ソン・ユンボク氏の涙をこらえた通訳から、事態の深刻さと証言の重みが伝わってきた。

※証言をもって午前の部は終了。昼食を挟み午後の部は、『北朝鮮一隠された強制収容所』の著者でもあり、元国連人権高等弁務官カンボジア事務所監督者、アメリカムネスティインターナショナル前理事でもあるデービット・ホーク氏の講演で始まった。



【収容所廃絶の青写真
—デービット・ホーク】

デービット・ホーク氏は、国際社会においては、強制収容所の実態が国際刑事裁判所ローマ規程の第7条の人道に対する犯罪として法的見地から糾弾できると説いた。さらに、六カ国協議における核廃絶に向けたステップ方式が、ある面では収容所廃絶にも適応可能であると述べた。また、グアタンナモ基地(テロ容疑者の拘留施設)解体に向けた具体的な青写真を例示し、北朝鮮強制収容所の解体にも応用可能であると述べた。現時点では、北朝鮮の強制収容所廃絶に向けての具体的な提案はできないとしつつも、収容所の管理体制などを知る収容所体験者とともに、ステップ・バイ・ステップで解体プランを構築していくことが方策だと提唱した。

強制労働、奴隷化をなくすための具体的な提言として、労働への対価を支給させる方策の検討を挙げた。飢餓については、食糧供給計画の受入れを要請していくべきだとし、さらに、収容所内での自由意志による結婚や子どもを持つ権利を認めるべきだと主張。政治犯と区分けされても、外部との接触手段は確保されるべきだとし、また収容者の基本的な権利は当然守られるべきだとし、殺人、奴隷化、拷問などを含むあらゆる非人道的、非合法的な収容所の実状を指摘し、収容者の扱いは、正当な司法手続きによらなければならないと非難した。

同氏は、繰り返し、国際法に基づいた具体的な提言として、無能力化、解体というプロセスをステップ・バイ・ステップで収容所体験者とともに構築していくことが重要であると強調した。



【世界の声・報告—小沼堅司】

小沼氏は、世界には北朝鮮の人権人道に対する犯罪に対してどのような声があるのかを2つの報告書をとおして紹介。最初に、チェコの元大統領ハヴェル氏、ノルウェーの元首相ボンデヴィク氏、および1986年ノーベル平和賞受賞者のエリー・ウィーゼル氏の3氏が北朝鮮の人権弾圧に対する措置を国連安保理に求めた際に公開の北朝鮮に関する人権報告書『Failure to Protect』*の内容を紹介。(*) Failure to Protect, A Call for the UN Security Council to Act in North Korea 2006)

同書は、人権と人道状況が悪化し改善の余地がなく、伝統的脅威(軍事的抑圧)と併せて平和に対する非伝統的脅威を肯定している北朝鮮政府に対する国連安保理の介入を強く求めていると述べた。報告書によれば、北朝鮮における政治的抑圧が核問題のために隠されてはいけないとし、安保理が措置をとることの正当性は保障されているとしている。

次に、イギリスのエリザベス・バーサ氏の書いた『"NORTH KOREA :A CASE TO ANSWER, A CALL TO ACT"』を紹介。同書には、北朝鮮の人権侵害、強制労働などが大規模かつ組織的に行なわれていることが詳述されている。さらに、北朝鮮ではキリスト教に対するジェノサイドが行われ、その明確な証拠も存在すると書かれていると述べた。

これらの報告書では、北朝鮮は、国家的、政治的責任を問われるべきであるとし、同時に各国、国際諸機関も解決に向けた責任を負っていると指摘。軍事的抑圧を生み出している政治的抑圧体制を国際社会は見逃してはならないと強く訴えていると小沼氏は報告した。

【世界の声・報告—海老原智治】



※海老原氏は、タイのチェンマイにおいて、北朝鮮に拉致された人々を救援する会(略称「ARNKA(アーンカ)」)の代表を務めており、主にタイの拉致被害者の救出活動を行なっている。同氏は、北朝鮮の人権侵害は国際的な問題であるとのスタンスでタイと北朝鮮との関わりあいに基づいて以下のように講演した。

タイには、昨年だけでも1500人以上、今年はオリンピック前に一時的に減少したものの、1000人はくだらな

い数多くの脱北者が流れ込んできている。タイは、ASEANの事務局長や国連の北朝鮮人権状況報告官を輩出するなど、国際社会における役割を果たしている国でもある。北朝鮮と国交を有し、北朝鮮との貿易高は中国、韓国に次いで第3位の位置にあると報告。

『Are They Telling Us the Truth?』という脱北者証言集の同氏によるタイ語への翻訳版の紹介をとおして、タイには体系だった情報がなかったと述べ、タイ国内において人権問題への認識をさらに高めていきたいと語った。

北朝鮮の人権侵害に関する情報、脱北者や収容所経験者の証言や各種の情報を体系立て、圧力に向けた基礎的な整備として、英語をはじめとして各国語による国際社会における情報の共有化が重要であると訴えた。

【世界の声・報告—ラジブ・ナラヤン】



※ナラヤン氏は、アムネスティ・インターナショナル前極東調査員で現在は延世大学(韓国)の招聘教授。

同氏は、主に二つのトピックについて述べた。一つは、世界人権宣言にも影響を与えたH.G.Wellsの貢献について、もう一つは、アムネスティ・インターナショナルの北朝鮮問題についての立場および見解について語った。

同氏は、H.G.Wellsの1940年の著作『The Rights of Man(人間の権利)』は、世界人権宣言やRooseveltアメリカ合衆国32代大統領が1941年に発した『年頭教書』にも影響を与え、同教書で宣言された人類の四つの自由、すなわち、言論の自由、宗教の自由、欠乏からの自由、恐怖からの自由は世界人権宣言の核にもなっているとして、H.G.Wellsの人権分野への貢献について述べた。

次に、1961年に設立され約220万人の会員数を擁するアムネスティ・インターナショナルの北朝鮮問題に対するスタンスと見解を述べた。アムネスティ・インターナショナルは北朝鮮は深刻な人権侵害を犯していると認識し、強制収容所は大きな問題であると考えている。人権侵害、食糧危機による餓死、管理所における拷問、公開処刑に対し強い懸念を示し問題提起に注力していくと語った。

【提案と討論】



登壇者：海老原智治、デービッド・ホーク、ラジブ・ナラヤン、キム・サンフオン(金尚憲)、ソン・ユンボク(宋允復)、イム(林)・ジョンズ、アン・ミョンチョル(安明哲)、砂川昌順

■海老原智治：タイにおいては、北朝鮮問題の体系的な周知がなされていない。情報の共有化を図ることは、今後の活動において有用であると述べた。

■デービッド・ホーク：収容所廃絶の青写真で述べた講演の内容を強調し、国際社会に問題提起できる力を有しているアメリカのアクション、および決裂の可能性はあるものの、六カ国協議においてフェーズ3に移った段階で、北朝鮮の人権問題が協議されることを期待していると述べた。また、現時点で収集されている情報は、80~90年代の犯罪に関わるデータであるため、ローマ規程の制定時期にも鑑み、特に2002年以降の人権侵害に関わる情報などを収集し整備していく必要があるとした。中国が拒否権を発動する可能性もあるが、国連安保理での協議や総会での採択に向けた働きかけも有用であり、EUの総会においての実績重ねも重要であると述べた。

国際裁判所へは、個人ベースによる提訴も可能であると進言。さらに、東南アジアにおけるネットワーク化にも力を入れていく必要があり、国際ネットワーク化も徐々に進展してきており、人権侵害を糾弾する声がNGOなどを通して高まっていくことを期待していると述べた。

■ラジブ・ナラヤン :

韓国の現政権は北朝鮮問題に対してはやや保守的な姿勢のように見える。インドの人権に対する意識は、イスラム教徒との関わりの中で高まりを見せている。EUにおいては、フランスを中心とした活発な動きも見られると述べた。

■キム・サンフォン (金尚憲) :

キム・サンフォン氏は、元国連世界食糧計画に18年間勤務。現在は、北朝鮮情報データベースセンター代表を務めているが、今回の国際会議には国際人権活動家として出席。

北朝鮮は強制収容所の存在を認めておらず北朝鮮の実態は世界に知らされていない。これらの現状を踏まえ、単なる呼びかけだけでは進展は困難と指摘。北朝鮮の実状を世間に知らせるためにも、今後はさらなる映像などのヴィジュアル的なツールの活用や国際的ネットワークの構築による情報の体系的な共有化による訴求活動が重要であると提言。世界人権宣言の価値を評価し、国連による人権査察を実現させる必要があると述べた。

さらに、国際刑事裁判では、提訴理由を明確に掲示することが肝心となる。提訴に向けた検討を進め、情報の収集、整備、明確な提示、プレゼンテーション力を高めることが重要となると提言。

■ソン・ユンボク (宋允復) :

北朝鮮強制収容所に関わる人権侵害の問題について、行政機関の上層部を含め世間にはほとんど知れ渡っていないことを実感している。社会へアピールしていくためにも、書籍の活用やメディアへのメッセージ送付など、各人が手近に出来る草の根的な世論への働きかけが重要であると提唱した。

■イム・ジョンス :

有事の際には収容者を皆殺しにされる恐れがあることに強い懸念を示し、対策が急がれることを強く訴えた。

■アン・ミョンチョル :

有事の際には、30万とも推定される収容所の人々を皆殺しすることになっている。自らも警備兵として、これを想定した銃殺を行う訓練を受けていた。これを防ぐためにも、北朝鮮の人権侵害状況を韓国内外へ知らしめていくための活動に注力していくと述べ、「NK Freedom」の今後の活動予定を明らかにした。

また、北朝鮮は、アムネスティインターナショナルが過去に実績を残したように、国際世論に敏感に反応する面もあり、国連による人権査察など国際社会からの圧力が効果的である。その実現に向けたロビー活動にも力を入れたいと

述べ、収容所以外の拘留施設などにおける人権侵害においても糾弾していくのと同時に、精神面でのケアにも力を入れていきたいと語った。

■砂川昌順 :

"べき論"から具体的な行動へと早急に移行しなければならない。国際刑事裁判所ローマ規定第7条の「人道に対する犯罪行為」に基づき、提訴に向けて証拠固めをしつつ、情報の体系的なデータベース化と共有化を推進して、国際世論作りを目指したいと述べた。

※司会を務めた小沢氏がパネルディスカッションの最後に述べた「一人ひとりがつながり連帯していくことが力となるという意味において"主人公は個である"」という言葉に草の根的なアクションの重要性が集約されていたように感じられた。

【詩の朗読—並河真知子】

提案と討論の後、NO FENCE世話人の同氏が登壇者や参加者への謝辞と併せて、自作の詩『人間だから』を朗読して閉幕した。

(詩の抜粋) <次頁に掲載>

 いっそ鳥に生まれたら どんなに幸せだろう
 いっそ家畜の方が どれほどましだろう

「東京国際会議」は、以上をもって閉幕した。

歴史に背を向けたときに、人類は大きな過ちを犯してしまうことになる。人類は、"酷過ぎる"ナチ収容所の存在を認めたくなかった。しかし、多くの証言が世界を震撼させ、調査が進み、真実が次第に明らかとなっていった。1939年の『白書』が、70年という時を経て、わたしたちに問いかけていることの中に、収容所解放に到達するまでに、こじ開けていかなければならない幾つもの扉の一つの鍵が収められているのは確かである。

北朝鮮は、偉大な指導者として尊敬され恐れられたいと願っている世界最悪の全体主義的独裁者により統治されている。金正日体制は、恐怖や飢餓を利用して個人崇拜を強化する中で、忠誠を示さない多くの人々を粛清し続けている。

国連の各種機能や機関、六カ国協議をはじめ、EU、アメリカ、韓国、日本など各国が打ち出す施策の多くは、人道に対する犯罪を犯し続けている北朝鮮指導部の力を維持する結果に陥っている。国際社会を恫喝する金正日体制への対応に国際社会も足並みが揃えられずにいる。金正日体制は、その乱れに乗じて食糧や燃料を入手し、体制上層部のみがほくそ笑むという現実がある。

独裁者のほくそ笑む裏で、今、この時も、多く

人間だから

ほら耳を澄ましてごらん
北朝鮮の人里離れた深い山の中から
救いを求めて泣き叫ぶ声がする。
男が、女が、年寄りが、子供が、赤ん坊が
鉄条網を張りめぐらせた収容所の中で
ボロボロに破れた雑巾のごとく
草を喰らい地獄を呻吟(さまよ)っている
飽食日本のすぐ隣で。
いつそ鳥に生まれたらどんなに幸せだろう。
いつそ家畜のほづがどれほどましだろう。
人間だから、人間だから
人間だから、囚われている

かつてナチのブーヘンヴァルトの収容所でも
そうであった。

人間だから憎悪された
人間だから差別された
人間だから迫害された
慟哭の民、ユダヤの亡霊はいう。
世界はふたたび囚われ人を見捨てるのかと。

价川(ケチョン)の耀徳(ヨドック)の清津(チョンジン)
の
収容所から虐げられた民の
すすり泣きがする。
断末魔の音がする。
ありとあらゆる暴虐と悪の住処・収容所で、
人間が人間を暴殺している
人間だから、人間だから
人間だから、自由と希望の道を歩きたい



NO FENCE 鹿児島エリア
並河真知子

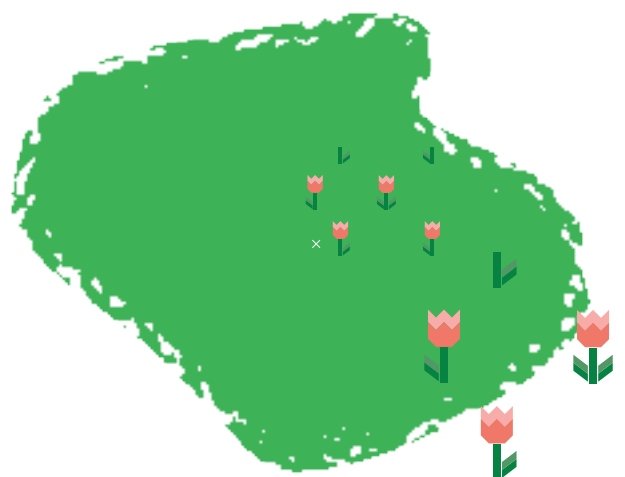
(会報中の写真は、菅原民生氏の撮影)

の罪のない人たちが死と隣り合わせの中で恥辱を受け、あるいは残虐にも死にいたらしめられている現実が隣国に存在する。人道に対する犯罪は、多くの脱北者の証言により、明らかである。北朝鮮の人権侵害の悲劇的な状況は言語に絶するものがあり、人間の基本的な権利を蹂躪する人類の最たる許すべからざる犯罪行為である。

韓半島情勢は、近いうちに激変するであろう。有事の際には収容者が銃殺やダム決壊により皆殺しにされるとの証言もある。あり得ないと言いたいが、あり得ない人権犯罪が存在し、理解できない主張を続ける国である。対策を急がなければならない。情勢の激変は、多くの犠牲者や多大の影響を生む恐れをひめている。

人権のない世界の存在を許すことは、わたしたちの存在そのものの否定にも繋がるものだ。今回の国際会議において、多くの貴重な提言が出され、それらの一つひとつが胸に刻み込まれ、今後の活動の指標となった。

許すべからざる行為がそこにあるとすれば、あってはならない現実が存在しているとすれば、何も恐れることなく、わたしたち一人ひとりが声を挙げ、断固として凜とした姿勢を強く示し、待つことなくアクションを起こしていくことが求められている。一人でも、今日からでも。



前日会議の記念写真(合成)



北朝鮮の死の強制収容所

北朝鮮の人道に対する犯罪を停止するために 大胆な新しいイニシアチブを

キム・サンフォン
金 尚憲*

NOFENCE の代表や優れた会員の皆様、国際的な人権組織 (NGO) と活動家たち、日本の市民の皆様、メディアの皆様。

本日、北朝鮮の隠された死の収容所とそこにとらわれている、かわいそうな無実の犠牲者たちについて、皆さんの前に私の見解をお話しできることをとても光栄に思います。

同時に世界中の人権侵害による無実の犠牲者たちに関心を寄せる日本の皆さんに対し感謝の意を表したいと思えます。

今日 (こんにち)、北朝鮮に秘密の死の収容所が存在することは、普通の認識となりました。悪いことに 20 万から 30 万人の、子供や女性を含む無実の犠牲者たちが、裁判 (法手続き) もなしに生涯そこに囚 (とら) われています。

元囚人、元収容所警備員、元役人たちを含む多くの証言があります。収容所を実際に監視した人も、今日この場にきておられますが、これらの証言は、北朝鮮の死の収容所で毎日起きている人道に対する最高にひどく、恐ろしい犯罪に対する痛々しい証言です。

これらの収容所のある姿はナチの強制収容所とソ連の収容所の条件を凌駕 (りょうが) しています。またそれ以上の悪夢は、北朝鮮のそれは組織的かつ巨大なスケールで死の収容所が何十年も永続しているという事実です。

私たちはすべての政治囚の釈放と死の収容所の解体のために北朝鮮の体制に影響を与えようと、力の限り残酷な程働いてきました。しかしまだ成功していません。私たちは今最も欲求不満を感じず手詰りの中にいます。即ち、誰もが、誰が悪い奴かはわかっていますが、しかしそいつをどうしようか何もしようとしていないように見えます。

私たちはここからどこへ行こうとするのでしょうか？

犠牲者が外国人であったり、個人的に見知らぬ人であるからという理由で、我々は座視して何もしようとしないつもりなののでしょうか。北朝鮮国家によってなされている人道に対する犯罪がこんなに明々白々なのに、私たちは沈黙の罪を犯そうとするつもりなののでしょうか。

私は深く確信しています。今日も北朝鮮で続いている非人道的で犯罪的な行為を停止させない限り、そのような残虐行為は今後世界のどこでも、どの時代にも広がり、起こるであろうことを。これが、人道に対する犯罪が、広がりには国際的に、もはや一つの国の主権、法制度、領域に限らない理由です。

私たちは歴史の生きた教訓から学ばなければなりません。その歴史とは第二次世界大戦の巨大な災害です。もしヒトラーが早いうちに押え込まれていたら、それは避けることができたでしょう。北朝鮮に関する行動は今差し止めて必要であるという強い確信を私は持っています。国際社会が、今進行中の以下に述べるような深刻な暴力に積極的に対応し、それにストップをかける時です。北朝鮮のふつうの人々を大量殺害、恣意的な拘留、拷問、その他関連する国際的な犯罪から救うことです。このために私は以下の提案をいたします。

- 1、国際社会に、より強いインパクトとアピールを与えるために、死の収容所の諸条件の生々しいビデオ撮り (Video footage)、蓄積された囚人の証言のコンピューターグ

ラフィック化や他のタイプの再現（化）など、目でわかる形の情報の制作が緊急に必要である。

北朝鮮の隠された死の収容所の恐ろしい現実を世界に明かすために多くの人権 NGO によって過去十年になされた活発なキャンペーンは、大半が文書、証言者の言葉による証言、新聞記事などでした。この方法はいにはいくつかの国の北朝鮮人権法と国際人権組織の諸決議、とくに 2006 年と 2007 年の国連総会決議に結実しました。しかしそれ以上の進展はなく、毎日多大な被害の中で多くの北朝鮮人の犠牲者が亡くなっています。

今日私たちが置かれている行き詰まりを打破するために新しい戦略が開発されなければならないというのが私の考えです。この目的のために、今後はドキュメントと情報の制作は目に訴える表現に移行しなければならないことを強調したいと思います。すなわちコンピューターグラフィック、ビデオによる切り抜き、再現シーンを使ったドキュメンタリー、絵画などの方法を使ったビジュアル（視覚）化です。

疑いもなく、視聴覚に訴える表現は全世界の人々の心を動かすことにおいて、文書よりもはるかに大きな力を発揮します。北朝鮮人権問題に最近関心を持つに至った人々は読んだものよりは見たものによってもっともドラマティカルに引きつけられたと言います。私たちは世界のレーダー網に乗るいい仕事をする事ができ、それによって北朝鮮の被害者のためにより大きな支援を世界中で爆発させることができるのです。

国連総会で北朝鮮人権決議を支援した国は 2006 年の 81 ヶ国から 2007 年の 97 ヶ国に増えましたが、全加盟国のおおよそ 50% です。例えば、新しい戦略は国連における支援国を全加盟国の 90% を表わす 160 ヶ国にまでに増やすことを目標とします。国連総会でそのようなくっきりした多数を達成すれば、国連安保理でロシアや中国が拒否権を行使するのをくつがえすことを可能にするでしょう。国連が任命した人権査察団もそのときには北朝鮮内部に入ることができるでしょう。それは現在のような嘆かわしい状況の難関を突破する新しい決定的な契機となるでしょう。国連のイラクでの大量破壊兵器査察が、何も成果を挙げられなかったのとは逆に、沢山の信頼のおける証言者たちは北朝鮮の中でのこれらの収容所の位置と集団の埋葬の場所を立証するのに役に立ちます。

2、法律専門家、人権 NGO と活動家の国際的ネットワークの形成

私はこの機会を借りて国際社会に訴えます。地球規模の責任事項としてこの状況の調停に入ること、そして人道に対するこれらの犯罪を停止させるためにその解決を先導することを。私たちは国際的な調停が働くことを信じます。

この目的のために、調停の仕事と、北朝鮮の死の収容所に関する情報の交換のために必要な法律の専門家、人権 NGO と活動家の国際的ネットワークの組織化を（私は）呼びかけたいと思います。そのようなネットワークは、また、さまざまな犯罪の性格と規模を決める証拠を集め、吟味し、考え、学ばなければなりません。さらにそれはこのケースを国連安保理や国際刑事裁判所の関心事とするために更にどのような行動がとられるべきかを勧告すべきです。この目的のために『北朝鮮、答えるべきケース、行動するための呼びかけ』と名づけられた、昨年ロンドンにある「世界規模のキリスト者の連帯」（クリスチャンソリダリティー・ワールドワイド）によって出版された報告書に注目されることを促したい。

終わりに私は次のことを強調したい。今こそ北朝鮮の死の収容所の廃絶に向って、私たちのあらゆる努力を集中する時です。北朝鮮の隠された死の収容所の無実の犠牲者のことで良心を動かされたあらゆる組織と個人の連帯とネットワークをつくることです。北朝鮮の中のこの悪夢を終らせるために、私たちはまだまだ努力しなければなりません。この危篤とも言える危機的状況を救うために皆さん、手を貸して下さい。参加して下さい。ご静聴ありがとうございました。



北朝鮮全体主義国家の実情を訴える／6団体共同集会 ＝アジア人権人道学会設立準備期成会＝ 12/14 報告

拉致、収容所、脱北、帰国者、アジアの人権



アジア人権人道学会設立準備会より掲載
http://d.hatena.ne.jp/asiaj/searchdiary/?word=%a5%a2%a5%b8%a5%a2

2008年12月14日、東京の明治大学リビティータワーで、6団体共同集会が持たれました。

6団体とは、特定失踪者問題調査会、北朝鮮の生命と人権を守る会、北朝鮮難民救援基金、RENK(救え!北朝鮮の民衆/緊急行動ネットワーク)東京、NO FENCE、北朝鮮による拉致・人権問題によりくむ法律家の会です。



この集会は、明治大学准教授の川島高峰さんがこの構想を約一年前から温めており6団体に呼びかけて実現させたものです。

始めに、川島さんから設立に向けて、その経緯と構想、展望について語られました。それから、日本フィルの江原望さんのチェロ演奏があり、脱北者二人の証言と続き、強制収容所体験者のチョン・グアンイルさん(Chon Gun-il)のシンポジウム(証言)の証言に続き、約5年間を中国で過ごし現在日本在住の脱北者ワン・ヘンソンさんは、中国における脱北難民の過酷な状況を訴えました。そのあと映画「めぐみ」が上映され、その他の会場では、チベット、新疆、内モンゴルの人権団体を含む参加団体の展示物や北朝鮮関連の映画などが披露されていました。最後は、北朝鮮の人権問題、拉致問題に取り組み5団体を代表する方々から、拉致被害者を救出し、人権弾圧を止めさせるために、私たちは何が出来るかを、それぞれの立場から発言されました。会場は、参加者で埋まり、熱気が溢れていました。複数のテレビ局でニュースが流されました。

今回、6団体共同集会を成功させた意義はとても大きいものがありました。起案者である川島准教授のお話については、あとで触れるとして、個人的な感想をまず述べさせて頂くならば、そもそも、市民団体ではない一識者がこの呼びかけを行ったことが大きな特徴で、そのことが潤滑にこの企画を進めさせたようにも思います。

共同集会三つの意義

準備期成会で、特に意義深く感じたのは、次の三点にあります。

一、6団体を一堂に会した集会

対北朝鮮問題で活動する複数の市民団体は、それぞれ達成目標の位置が異なっていたり、そのやりかたの違いがあります。しかしその一方、様々な角度から取り組んでいる意味があり、そのノウハウを生か

し合うこともできます。時には結集して声を大きくしていくことも可能です。そのきっかけ作りとしてこの共同集会の実現はそれぞれの問題解決のために共通の土俵を用意することになりました。

二、学会設立を目指している。

人権人道学会構想は、従来型の学問分野領域にとつても、市民活動のありかたにも限界と閉塞感があったところ、それが一歩先を踏み出せるきっかけになるとも思います。同時に、北朝鮮やアジアの人権問題は、鋭智を集め取り組むべき重要課題として社会的に位置づけ認知させ、ひいては北朝鮮を初めアジアの人権問題を社会的に広げて行くきっかけを作ることになります。

今日迄、身近な国でありながら、北朝鮮の人権問題に関与すること自体が、限られた特殊な人々の世界として捉えられてきました。たとえそれが人権問題であつても、北朝鮮の問題に関与すること自体が無視され、時に排除されがちでした。

しかし、「学会」という概念は、正面から座視しなればならない問題だと人々に気付かせ、そういう偏見を取り除く機会にもなり得ると思います。

三、北朝鮮に留まらず、対象にアジアを掲げている。

とかく一般に、「北朝鮮」というだけで大衆が拒否し嫌悪しがちです。しかし、「アジア」の一語を加えることで、北朝鮮も同じアジアの一員であり、北朝鮮の人権も人道も同じ普遍的なテーマであると気付かせ、北朝鮮抜きの人権問題という偏見を解除せざるを得ないのではないのでしょうか。実際に、アジアの人権状況の改善は、北朝鮮の脱北者の受け入れ周辺国の実態を考へても、欠かすことの出来ない重要な問題であり、同じアジアの仲間としても無関係ではありえないからです。

川島高峰さんは、このようなお話をされました。

「北朝鮮問題に関心を持つようになったのは、十一年前の九四年。食料援助をどう行つかという集会有りそこで突如、この本を読めば分かる。一度読んでみて下さい。」と懸命に抗議していた男性の訴えと出会い、アン・ミンチルの「北朝鮮絶望収容所」を読んだ。それで始めて北朝鮮の実態を知ることになった。もしその男性の訴えと出会わなかったら、そのまま何も分からないうままにいたと思う。このことが北朝鮮の認識を変える大きな契機になった。その男性は小川晴久先生だった。と話されました。その男性は小川晴久先生だった。と話されました。また、理念として、学会というところで、学問のあり方を根底から考えなければダメだ。」

さらに、「私たちは、すぐに国家観と歴史観とで他者と相容れなくなってしまうことがある。人が幸福であるためには、必ずしも、壮大な国家観や深遠な歴史観は必要ではない。むしろ、そういったものが、どれほど多くの人のための幸福、祈り、絆を踏み留めてきたらうか、このことを痛切に感じる十年であった。」と話され、さらに具体的な構想を述べられました。

一 東アジア、東南アジアの人権人道をめぐむ比較分析の必要性。

二 学術が、レコードの支援をする。

三 国際人権が、国内化するということ、国内人権の国際化ということその重なりあつたところで人が幸福になるための新しい価値を考へていく。人権人道のガバナンスの必要性。人間の安全保障と、国家の安全保障という概念を、相互補完的に考へざるを得ない。多くの争点の解決策を、皆で頭を寄せ合つて考へていくことが絶対に必要。

四 そして最後に「北朝鮮の人権の問題は、東アジア、東南アジア全体の人権の問題として考へて行かざるを得ないのだ」とのこと。これが、「北朝鮮全体主義国家の実情を訴える6団体共同集会」、そしてそれを「アジア人権人道学会設立準備期成会」として実施させていた理由です。」として挨拶を終えられました。

問題解決への課題と展望：

当会の宋允復氏からの発言もあり、「国際的な印象では日本は拉致問題しか関心がない」ところとされている。またアムネスティも、同様の判断で、北朝鮮の人権問題に関しては慎重にすべきであるという判断があつて動かなかったということも分かりました。

NO FENCEが十一月七日に行つた国際会議でも、いくつか具体的な活動の方向性が示されましたが、6団体共同集会においても基本的なスタンスはほぼ同様でありました。それは、協力して情報をデータ化・体系化することです。それに加え、協同活動作業の実施ということがあります。新たな協同活動のひな形が近日中に示されると思います。NO FENCEは、規模も小さく、組織としての経験も浅いですが、他の団体と同様の体力はありますが、貢献できることは十分にあると思います。

砂川昌順共同代表の「拉致問題は、自分の人生における命題として取り組んで解決していきたいと思つている」というお話もあり、拉致問題の解決を図る上で、北朝鮮の強制収容所を始めとする人権問題の改善・解決に向けて、世界的な力を合わせていくことが大きな解決への道に繋がるという認識を共有できたように思います。

(報告) 小沢木理